

流行神の展開過程

——近世山科妙見を事例として——

村田典生

〔抄録〕

民間信仰のなかで、ある時期急激に参拝者が増加する現象を流行神と呼ぶ。この流行神の近世京都における展開過程を考察する。今回事例として取り上げるのは『月堂見聞集』という随筆に登場する山科妙見である。享保期に流行をみた山科妙見であるが、そこには当時よりさらに二〇〇年以上も前に没した日蓮宗の高僧、日親の名が現れる。そこでまず日親の人物像と功績を抽出し、山科妙見との関連を明確にする。その後山科妙見の流行について検討する。

その方法としては当時の随筆や京都府や京都市に残る文書を利

用するとともに、妙見参詣路を実際に歩き、また現在は寺院となつている妙見寺やその周辺での聞き書きという方法をとった。そうすることで日親から山科妙見へと続く流行の変化を時系列的に捕捉することができると考える。その結果流行神の祀り上げられる過程とそこにある社寺側の運営戦略や市井の人々の信仰と遊山の関係、さらには流行神の土着化の進行を明らかにできたのではないだろうか。

キーワード 民俗信仰 流行神 山科妙見 日親上人 『月堂見聞集』

はじめに

京都市山科区大塚に妙見寺という寺院がある。【写真①】山にせまる住宅地が名神高速道路と接する場所に位置している。普段参拝者はほとんどいないような今では檀家が五軒ほどの小規模なお寺である。

この現在は日蓮宗の寺院である妙見寺にはその名が示す通り妙見菩薩が本尊として祀られており、境内中央には鳥居がある。また門前の道路を挟んですぐ南側に庭園があり、妙見大菩薩と書かれた額のある鳥居と庭園中央に「南無妙法蓮華経 日祥」と刻された大きな岩が鎮座している。そしてこの門前を東西に伸びる道路は妙見道と呼ばれ、こ



【写真①】現在の“山科妙見”妙見寺

の妙見菩薩への参詣のための道なのである。

この妙見道は今からおよそ三百年前に大いに流行りをみた山科の妙見さんへ参るために崇敬する人々によって作道されたおよそ四〇〇メートルに及ぶ一直線のものである。江戸期、具体的には享保の頃から流行った妙見の祀り上げられていく過程を近世の随筆と近現代の書物から検証する。その方法として以下の要領を踏襲することとする。

山科の妙見の記載がある『月堂見聞集』を分析すると、当時からして二〇〇年以上も前に逝去している日蓮宗の高僧日親の名ががり、それが山科の妙見の隆盛へと繋がるのである。そこでまず日親の人物像とその功績を抽出し、なぜ日親の偉業がこの時代にクローズアップされたのか、そして日親参詣が流行りになったのかを検討する。

次にそこから山科の妙見が流行神^{はやりがみ}となった経緯とその展開を本居宣長の『在京日記』や『拾遺都名所圖會』といった史料を使用し、追跡することとする。また史料だけでなく、現地での取材・聞き書きを行い、特に山科に現存する道標の銘文からも当時の山科妙見の流行の様子を調査する。

こうすることで、日親から山科妙見へと続く流行の経年変化を時系列的に捉えることができると考える。流行神の祀り上げられる過程とそこにある社寺側の運営戦略や市井の人々の信仰と遊山の関係、さらには流行神の土着化の進行を明らかにしようとするものである。

第一章 『月堂見聞集』における山科妙見

元々山科のこの地には古くからこの妙見を祀ったとされる堂宇があ

つたとされている。明治一六（一八八三）年に作成され京都府に提出された『京都府寺院明細帳』には妙見寺の由緒として「桓武天皇平安遷都ノ時玉城四方ニ北震星ヲ祭り玉フコノ像ヲ以テ東方ト定メ玉フ」とある。

それから長い年月の後、享保年間のある時期を境に京洛中からの参詣者が訪れるようになったのである。その記述が江戸時代宝永から享保年間の火事や地震、怪異や高札、武家・貴族の冠婚葬祭に至るまで細かく日記調に認められた本島知新なる者によつて著された『月堂見聞集 卷之十九』に詳細にある。この件の記述の最初は享保一一（一七二六）年一〇月頃の条にあり、以下のとおりである。

「妙見堂へ参詣に付言上の覚

一、城州宇津郡山科郷大塚村領山岨に、従往古妙見菩薩之小堂有来候、当夏比より参詣人少々有来候処、頃日は毎日他所より参詣人次第に多く罷成に付、御断申上候、以上」

この記述によれば、昔から大塚の山中にあった妙見を菩薩が祀られていた堂宇に最近急に参詣の人々が増えだしたというものである。そして次の条にて詳しく状況が述べられている。

「山科大塚村妙見菩薩諸人参詣の濫觴は、去年秋の比去る者眼病を憂て、大谷日親上人の墓に百日の間参詣す、或夜夢想に云く、汝が眼病は山科の妙見菩薩に祈誓すべしと、其以後参籠するに忽に癒ゆ、是より初るといへり、山科蓮如上人の墓より十四五丁東に当て、六地藏海道の方山の麓也、堂南向、木像長ケ二尺六七寸、座像、御首の髪垂れ下る、冠なし、左手にミを持つ、右の手に剣を持つ、亀に乗る、

其の下に石座あり、開帳銀一枚づ、也

この山上二丁計に石の鳥居あり、天神社あり、南向、此地の氏神の由也、或説に仏道にては妙見菩薩と云、天文道にては北斗星と称す、道家には鎮宅靈符神と称すと也、此星の宮の事三代実録に出づ、但し誤り、推古紀に名勝志に出づ」とある。

これによると、享保一〇（一七二五）年の秋頃ある者が眼病を患つて鳥野野の西大谷、本寿寺にある日親の廟所に百日参籠したことが事の発端という記述である。この眼病を患つた人物は当初山科の妙見ではなく日親上人にすぎたのである。しかし、日親の廟所に百日の間懸念に参籠してなおこの時点では眼病は平癒せず、夢告として日親に「山科大塚にある妙見に参詣せよ。」と言わしめているのである。そしてその妙見に参籠するや「忽ち」に平癒してしまうという奇跡の顕現を見るのである。それ以来、この『月堂見聞集』に記述がなされるまでの一年の間、特に「当夏比より」とあるように数ヶ月で急激に参詣者が増加したというのである。

ところでこの眼病を患つた人物は先述の通り日親上人の廟所に参籠している。日親に参籠するということは当時どのような意味合いを持つのだろうか。次章では日親廟参籠を検証する。

第二章 日親上人

第一節 日親のイメージ

日親とは「鍋かむり日親」と呼ばれた室町時代の日蓮宗の僧で、『折伏正義抄』や『立正治国論』等を著している。中尾堯は「日蓮が



【図①】 日親法難の図『開山日親上人徳行図』より。(本法寺所蔵)

体験した、権力者への諫めと、そのゆえに受けなくてはならなかったさまざまな法難を、日親はみずから敢行したのであった。この体験の中からかれは、「仏法至上主義」をきわめて明確に把握、日蓮からの正統を受けつぐ僧侶としての自己を確認し、折伏による命がけの伝道におもむくのである。⁽³⁾と述べている。このように日親の布教活動は折伏を主とする激しい布教であり、これらの著作はその象徴ともいえる。

そしてこの激しい布教活動ゆえに度々過酷な法難に遭遇したのである。日親の最大の法難は永享一二(一四四〇)年、室町幕府六代將軍足利義教による投獄、拷問である。【図①】日親は足利義教を諫曉すべく『立正治国論』を手に三代將軍義満三三回忌法要への直訴を決意し

たが法要直前に発覚し投獄された。その際、高温に熱せられた鍋を頭に被せられたり、舌を切られたりという拷問をうけたのだという逸話が残されている。改宗をせまる拷問をうけてなお法華經を説いたという「鍋かぶり日親」の異名はここからきているのである。

ただし、中尾は日親自身の自伝にあたる『埴谷抄』において「水火の責に合せられしは」とのみ書かれていと述べていることから考えると、拷問は事実であるものの内容は後述する後世の付会によるものであろう。

日親を投獄した義教は殺害され、日親は解放される。その後京都に本法寺を開創して京都における宗門は拡大する。では「鍋かぶり日親」のイメージはいつ頃定着するのだろうか。

望月真澄は論文「町衆と日親」⁽⁴⁾なかで、「日親開山の京都本法寺の二〇世日匠は『日親上人徳行記』を著し、日親の法華經布教の道程と法難を説いた。それを受けて二七世日達はこの『日親上人徳行記』を平易な文章にして元禄一五(一七〇二)年に刊行している。これ以降日親が次第に庶民にも親しまれるようになっていった。」(筆者要約)⁽⁵⁾としている。この『日親上人徳行記』は中尾によると二〇段、望月によると二一段からなり、その十一段「冠鑑」(望月論文では「なべかむり」とルビがふられている。)が先述のように強烈なインパクトであり、日親のイメージを定着化させている。

第二節 日親上人徳行記による信仰の展開

日匠は元禄二(一六八九)年に没している。⁽⁶⁾本法寺には「日匠上人

曼荼羅本尊」が寺宝として遺されており、その銘は「寛文第九年龍集己酉九月十七日 洛陽叡昌山本法寺常住」¹⁰となっている。とすると『日親上人德行記』が漢文体で作られたのは延宝・天和・貞享年間あたりではなからうか。そして元禄元（一六八八）年頃近松作とみられる浄瑠璃でその名も『日親上人德行記』が初演されている。これは貞享四（一六八七）年が日親没後二百年にあたるため、その遠忌に合せたのではないかとみられる。¹¹当時の先端メディアであった浄瑠璃に取り上げられることで日親は広く知らしめられていく。その後、元禄一五（一七〇三）年には本法寺三七世日達によってカナ交じり文での『日親上人德行記』が刊行される。この元禄の頃に日親は再評価され、その生前の厳格にして純粋な布教活動と過酷な法難に耐える日親の姿、すなわち「なべかぶり日親」像が形成、流布したと考えてよい。その焼け鍋をかぶせられてまで改宗せずに教線拡大に邁進する、艱難辛苦に打ち克つという日親は人物自体が信仰の対象として広まったのであろう。

さらに浄瑠璃やカナ書き文によってその信仰は日蓮宗徒や法華経信者に留まることはなかったといつてよいのではなからうか。元禄から『月堂見聞集』が著された享保を経て宝暦年間に至るまで、本法寺や鳥辺山の廟塔をはじめとする日親ゆかりの地は霊蹟として日親信仰の拠点となったのである。『日親上人德行記』の最終段「滅後応驗」では日親没後の「さまざま奇瑞や靈驗談を物語り、現世利益の信仰をすすめている」¹²ところからしても、本法寺が全山をあげての布教に努めたと考えられる。

こうして激しい拷問や数々の法難に耐え、関東から九州にまで法華經布教に奔走したという日親は江戸中期、没後およそ二百年を経て再び庶民の人気を得るに至った。それは本法寺や鳥部山の廟塔をはじめ各地の霊蹟に参詣者を送りこむこととなった。まさに「流行った」という表現が正鵠を射た状況といえるだろう。

筆者は『月堂見聞集』における記述から日親に「眼病平癒」の効験があると考えていた。そこでそのことを確認しようと、京都市東山区の鳥辺山の日親廟所である本寿寺を訪問した。¹³その時、住職は留守だったが、檀家の男性と寺守の女性から話を聞くことができた。女性の談によると「長いこといてるけど」眼病平癒ということに関しては「そんなことは聞いたことがない」ということだった。男性は「眼病だけでなく、そういうことも含めて病氣平癒や延命祈願ではないか。」とのことだった。確かに史料でも元治元（一八六四）年の『花洛名勝図会』「東山之部七」に「日親上人廟塔」の記載があり、「現當二世の利益を求め異体同心の善縁を結ぶ」とあり、眼病に特化しているのではなく現世利益としての病氣平癒の一環であると認識するに至ったのである。『月堂見聞集』に記述されている人物は眼病を患ったので病氣平癒を願う現世利益の祈願として参詣したのであろう。

この人物は何者であるかは『月堂見聞集』に記述はない。もちろん日蓮宗徒や法華経信者である可能性もある。しかし、「百日の間参詣す」という言葉から「百日法華」である可能性もまた否定できない。百日法華とは日蓮宗徒でない人がその人の宗派を百日の間だけ棄却して法華経を信仰することである。¹⁴百日と期限を設けて一心不乱に法華

の寺院や廟塔に参詣して除災を祈念するものである。もちろん日蓮を祖とする法華宗を中心にこのような形式で他宗からの改宗・転宗を促進するという教線拡大のツールであったことも否めないのではあるが、祈願する人物にとつては一時期元の宗派を棄てて法華經に頼つても完遂したい事象であることに変わりはない。

この人物にとつて日親廟塔への百日の参詣は眼病平癒という奇跡の顯現への第一歩となつたのである。

第三節 日親夢告

この節では何故日親による夢告があり、山科妙見を紹介したのかについて検討する。なおこの節では『日蓮教団の諸問題』¹⁵に収録されている坂本勝成の論文「京都の妙見信仰―洛陽二十八カ所開運妙見の場合」¹⁶が有効な手がかりになると思われるので、関連部分について参考にし、考察する。

日親は本法寺の開山であることは既に述べた。さらに元禄初めにその日親上人の二百回忌の遠忌でもあつた。そのこともあり日親の法難は浄瑠璃にもなり、日親は再評価され本法寺派のグループは元禄・宝永の頃は隆盛したと考えられる。しかし、この直後関東から同じく日蓮を祖とする別派の日法という大上人が上洛するのである。

坂本論文によると日法は「一道院日法」といい「甲斐身延の久遠寺第三十一世一円院日脱の法嗣で、早くから加持祈禱の名手として知られ」ており、「修法靈驗効果のうわさは、いち早く江戸將軍家にも聞え宝永年中」には姫公一條御政所様の御悩を早速全快させ「名声をは

せ」、この後堀川の本蔵寺に七代目として上洛したのである。日法は就任してすぐ鴨川のほとりで修行をし、町中の噂となり本蔵寺は加持祈禱を求める人で賑わつたのである。このことから正徳二(一七一二年)年には靈元法皇の「大御悩」を忽ち全快させ、「御寄附黄金三百枚、紫御紋附御幕」等々拝領し、禁裏の「御局方からの書状宛名は皆悉く勅願所一道院と」なつたのである。この日法の「修法の際のよりどころをするのは能勢妙見菩薩の信仰」であつたのである。以上は坂本論文関連部分の筆者による要約である。¹⁷

この状況は日親が流行した元禄と山科妙見が流行した享保の間、宝永・正徳年間である。日親の流行がひと段落した頃と考えてよからう。江戸から將軍家の絶大な信頼のもとにある日法が上洛し、市中の目立つところで苦行を行う派手なパフォーマンスと江戸での手柄話で京洛を席捲していつたのである。さらには靈元天皇や宮中女官の信頼を得て、一躍時の人となつたようである。

こうした状況に日親系の本法寺派は巻き返しを図らなくてはならなくなつたと推察する。日親廟塔や本法寺への帰依、参詣は日親への「百日法華」等で元禄以降増加したことが考えられ、本法寺のグループはその運営規模を拡大させていたと思われる。そのなかで同じ法華宗の別派が京洛市中から信者を篡奪するという展開になつたのである。しかも、開山日親が本来目指した將軍家・宮中に正確な意味ではないにせよ諫曉も行って成功し、特に宮中女官との関わりを持つに至つたのである。このことは本法寺グループにとつては歓迎できない事態であつたといえよう。

そうしたなか、山科妙見の選定理由としては次の三点を列挙したい。第一点目として山科は能勢に対して市中より東にある点。第二点目として日帰りできる点。能勢の妙見へは日帰りは無理である。そして第三点目として、山科妙見は聖武天皇がこの地に妙見を祀ったことに始まり、桓武天皇が平安遷都に際して東方の北辰星を祀りこの妙見を東方と定めたという権威付けができる点である。三点目の部分は次章でも述べることにする。以上私見としての選定理由である。

このような状況下で、享保四（一七一九）年に日法がこの世を去って数年の後、享保一一年に山科妙見は日親の夢告を受けた眼疾の信者による参詣を受け、流行へと向かったのではないだろうか。

第三章 山科妙見堂の流行り

第一節 大塚村と妙見堂

日親への参詣の結果、眼病に効験があると夢告を受けたその人物が向かった先は、当時眼病平癒の民間信仰で知られていた市中の四条橋詰の仲源寺目疾地藏ではなく一山越えた山科郷大塚村の「山岨」にある妙見堂であった。

この妙見堂は先述の通り現在でも妙見寺として現存する寺院であるが、その寺伝によると桓武天皇が平安遷都の際に都の四方に北辰を祀ったという話があり、「はじめに」でも触れたが、明治一六（一八八三）年の寺院明細帳にはその由緒として「聖武天皇御宇ニ北震妙見大菩薩此地松原乗鞍ト云所ニ始テ鎮座シ其後桓武天皇平安遷都ノ時玉城四方ニ北震星を祭り玉フコノ像ヲ以テ東方ト定メ玉フ趣傳來ニテ由縁

年月等不肖（以下略）¹⁸」と記され京都府に提出されている。妙見堂の東方さらに山中には天神社もあり、この辺りが天や星に祈る場であったのではないかということを想起させる場所ではある。

ただ『月堂見聞集』以前においては地元の文書に記載されている程度である。近松の『日親上人徳行記』が上演されていた元禄五（一六九三）年の比留田家文書¹⁹にはその六月に『城州宇治郡寺社御改帳』を公儀に提出しているのだが、そのなかに「無本寺 明見寺」とあり、「宇都宮弥三郎朝継守本尊之由申伝候 年数知不申候」と記載されるに留まっている。また宝永二（一七〇五）年七月に提出された『寺社御改帳』（比留田家文書）には「妙見井（菩薩）²⁰」とあり、「無本寺 妙見寺」となっている。「是ハ宇都宮弥三郎守本尊之由申伝候 往古は火ともしの出家御座候由申伝候へとも只今ハ式間四面板葺之堂計御座候（以下略）」とあるばかりである。このことから考えると享保前期までは京都の市中の人々には知られていなかったと考えると差し支えないのではなかろうか。それが享保一一（一七二六）年夏頃より参詣人の増加をみたのである。

第二節 妙見さんと眼病平癒

妙見菩薩は平安時代より眼病平癒に靈験があることは貴賤を問わず既知のことであり、中西用康が『妙見信仰の史的考察』のなかで『権記』には一条天皇、『百鍊抄』や『今昔物語』、『扶桑略記』では三条天皇あるいは鳥羽天皇も妙見に眼病平癒の祈念をしていることを述べている²¹。また、この中で『今昔物語卷卅一』の第廿では洛北にある靈

厳寺に「万ノ人皆」、「妙見の現ジ給フ所」として参詣していたところに三条天皇が参詣しようとしたという話があるように、妙見信仰と眼病平癒が庶民の間でも既に根付いていたことが窺われるのである。

ただ、中西も述べているように「妙見を視力だけの守護神とする根拠は經典の上には見当たらない」²²のである。しかし、經典上には無くとも妙見といえは眼病平癒の功德があると考えられていたのである。

確かに「薬師は妙見の本地、妙見は薬師の垂迹」²³とする經典『七仏薬師所説神呪』があり、薬師如来は病氣一般の平癒を祈念する仏であることからその垂迹たる妙见到病氣平癒を祈念するもののだが、しかしながら眼病に特化している場合が多いのである。

ところで京都において眼病平癒に効験、功德があるとされている神仏としてすぐにその名前があがるものとしては先述したがひとつは四条橋詰にある仲源寺の目疾地蔵と長岡の楊谷寺柳谷観音であろう。特に目疾地蔵は四條橋の至近にあり、定番として大いに名を馳せていたのである。また柳谷観音は寺伝によると靈元天皇が自身の眼病平癒を祈念し、この地の独鈷水によって平癒したと伝えられている。²⁴天皇在位中とすれば、天和・貞享の頃かと思われ、かつ靈元は上皇となった後も院政を行っており、享保一七(一七三二)年に崩御したことを考えると、『月堂見聞集』に記載はないもののこの時期頃から柳谷観音への信仰が高まりを見せていたことも考えられる。都の東西の山中に眼病平癒に靈験あらたかな堂宇が存在したことになる。

第三節 山科妙見堂の流行の展開

ともあれ、山科の妙見は参詣者が増加していた。先述の通り都の中心部からほぼ日帰り圏内²⁵であり、遊山を兼ねた人々も数多く足を運んだことと考えられる。この参詣へ足を運ばせるにたる一日圏内という距離は山科妙見の流行の重要なファクターであり、第二章で述べたとおりこの妙見選択の戦略でもあったであろう。

この適度な遠さと今まで知られていなかったものの珍しさが「忽ちに癒ゆ」という靈験譚に加わり東山を越え、山科盆地を横断させてまでの流行りにつながったとみてよからう。山科盆地の中心部にある蓮如上人墓も良いランドマークであり、月堂自身の参詣時の目印として『見聞集』にも記載されている。真宗と日親夢告の妙見とを同時に巡るという本来有り得ない組み合わせも遊山であれば可能だったのかもしれない。

『月堂見聞集 卷之十九』は一〇月の条で山科妙見のことをかなりの行を割いて記述している。これはこの書物の中では比較的長文である。さらに同巻では享保一二(一七二七)年の正月の条に短文で「七日より粟島神像、妙見菩薩、孔子像開帳、同六十日之間、上京北野社田中宮内」と記述している。ここでも妙見の開帳があったことが確認できる。

山科妙見はその後『月堂見聞集 卷之二十一』に再び記されている。二月二五日の条で「二月廿五日より五十日の間、山科大塚村妙見菩薩開帳」と短文であるが記述されている。さらに四月十日条では卷之十九の時と同様長文で山科妙見を記述しているのである。少し長いが全文に近い形を以下に記す。

「四月十日、山科大塚村妙見菩薩開帳の筈に候処、又々御願申上候て、当月二十八日迄延び申候、今度開帳は本堂新敷造作有之に依て也、(中略) 此妙見菩薩は北斗星にして、推古紀三代実録にも星の宮と出たり、一兩年已前此所の神主、此宮の辺の樹木を切て売る、一樹を切るに至つて其者絶入す、怪敷覺候て其木を切れば柿の木也、豎に二つに破れば、其木の内に見大北妙一心と云う字、濃墨にて書たる如し、此柿の木長さ一尺四五寸丸さ七八寸程也、帛に包み箱に入神宝とす、是より諸病を祈るに早速平癒す、妙見の名始て都鄙に赫々たりと云々、一名太山府君、一名太白星、又は北斗星ともいへり、四月十日参詣す、依之首尾を記す」

四月十日に本人が山科まで出かけてそこで話を聞いてきたのである。柿の木のくだりが詳細に記載されている。今回の開帳は本堂を新築する浄財を賄うためである旨が記載にある。また五〇日間であつたはずの開帳期間が延長されたことについても触れられている。

しかしながらこの条で特筆すべきことは、利生が変化したことである。享保一一年の段階では眼病平癒という利生であつたものが、「諸病を祈るに早速平癒」するということのように変化している。しかも「見大北妙一心」という字が書かれた柿の木の顕現とその宝物化という文言もある。変化というよりも利生の追加ともいべき現象が生じているのである。

筆者は現代の京都における御金神社の流行に際し、「社寺運営の戦略には利生の変遷が見られる」と述べたのだが、近世の場合においても利生の変化が見受けられるのである。眼病平癒から諸病平癒へ、

妙見菩薩からその利生展開に必要な新たな「神宝」の顕現がなされており、「本堂新敷造作」のために新たな参詣人獲得のための利生の変遷という社寺運営上の戦略が見えてくるのである。

その後、『月堂見聞集』に山科妙見堂の記載は無い。しかし、この記事から二六年後の宝暦六(一七五六)年に本居宣長が自身の京都滞在中に書き記していた『在京日記』²⁷⁾に山科妙見堂に関する記述が見られるのである。その四月の条に以下のように記されている。

「八日、(中略) 此ころ山科妙見菩薩も開帳にて、にきはしきよしうけ給はる。(以下略)」

「十六日、(中略) 山科の開帳も、この比はまいり多きとかや、夜国美人の像²⁸⁾という物をつくりて見せ侍るよし、いとよき細工なりとそ。」

この記事からは宣長本人は参詣してはいないものの、山科の妙見が賑わいを見せている事を二回も人づてに聞いているようである。遠来の宣長が二度に亘り話題として提供されるほどに活況を呈していた様子が窺える。この「夜国美人の像」が如何なるものなのかは定かではないが、妙見堂が新たに話題となる像を開帳して参詣を促していることがこの記事から確認できる。

先述の『寺院明細帳』には「延享年間ヨリ日蓮宗の僧コレヲ管ス」とあり、この宝暦の頃には日蓮宗系の堂宇となっていたのである。そして明治二(一八六九)年正式に日蓮宗の寺院としての妙見寺となるのである。

第四節 妙見道標について

山科には「妙見道」と名付けられた道があることは先述した。この妙見道には道標が二基残されている。1基は「明見道(ママ)」(以下「道」と表記)と刻された道標で山科盆地の西側旧東海道中にある。もう一基は現在の妙見寺(妙見堂)の西五〇メートルのところにあり「妙見宮」(以下「宮」と表記)と刻されている。【写真②】

さて、この「宮」道標・妙見寺間は先述のとおりほぼ一直線の道路になっており、この「宮」道標はこの道路を拡幅・修正した記念のものである。道標の東側側面に「横幅一丈三尺 奥行三町余見道 妙見講申立合改之」と刻されていることで確認できる。しかし、双方ともに建立年が刻されていないため「江戸時代で間違いない。」³⁰とのことではあるのだが、正確な年代は不詳とされている。ただ、「道」の道標は「二条講中」が、「宮」の道標は「日出講」が建立したと刻されており、山科妙見に講が少なくとも二つ存在していたことが確認できる。これらの道標によって京都市中から山科妙見へ参詣した多くの人々を誘ったのである。

この「宮」道標には南側側面に日出講として四名の名前が刻されている。特定できる人物がいれば建立年代が判明する。この中の「松坂屋儀兵衛」という人物は京の寺町五条で版元を営んでいる人物の可能性を孕む。享和元(一八〇一)年に『鎮国至宝 新刀銘鑑』や享和二(一八〇二)年に『玉之枝』の版元として出版している人物である。また、もう一人「伊勢屋七兵衛」という人物は文政七(一八二四)年に出版された『江戸買物獨案内』に江戸・本町三丁目の薬種商人としてその名が記載されている。同一人物の可能性がある。もし、この両



【写真②】 妙見道標と妙見道

名がこの人物ならば、「宮」道標の建立は一八〇〇年代前期の文化・文政の頃ということになる。しかし、現段階では同一人物という史料はなく、その確証を得てはいない。ここは仮説に留めたい。

むすび

山科妙見堂は享保以降江戸中期に流行した。『月堂見聞集』によると眼病平癒を祈願するために日親上人廟塔へ百日参詣したものが、夢告によってたどり着いたというのである。そこには二重の流行りという現象が看取できるのである。

「鍋かむり」日親への参詣による病氣平癒が元禄以降流行し、さらにその夢告によって山科の妙見が流行った。流行神示現という現象が重複し、流行りが流行りを現出させる展開となったといえる。

筆者は拙論「流行りだす神仏―その構造と思想^①」において、普段の信仰形態では賄いきれない状況が現れた時に個人やその集合体としての家族、集落が急激に普段信仰している神仏から別の神仏へ祈願対象を変更せしめた状況をして流行神の現出という現象を論じた。

今回の状況は百日法華をはじめとする市井の人々の病苦に対する一刻も早い平癒を祈願する心情とそうした状況を巧みに取り込んで運営の強化を図りたい社寺側の戦略のマッチングが奏功しているとみてよい。

ところが急激に祀り上げられた流行神は祀り棄てられる運命にもあるのである。それは流行神の功德の発現によって普段の賄いきれない信仰状況が終了した時、あるいは賄いきれない状況が回避できた時、

つまり普段の信仰で対処できる状況に戻った時点で流行神の役目は終わると考えられる。

理論上流行神が祀り棄てられる状態になったとしても、社寺側としてはその運営に困窮する状況にならないようにしなければならない。そこで利生の変化や観光要素の取り込みによって流行の持続を図る。何度か流行り廃りを経験するうちに土着化することもある。あるいはより熱心な宗教者が教義の高度化をはかり教団化へと向かうこともある。

今回の山科妙見のケースは日蓮宗、特に日親開山の本法寺による喧伝もあると考えられるが、それ以上に京中の人々に大いに受け入れられたのである。しかも眼病平癒から諸病平癒へ利生を変遷（拡大）させ、「妙見菩薩」に加え「見大北妙一心」という神宝の顕現や「夜国美人の像」の開帳まで話題を提供し続けたのである。

さらには平癒を祈念しつつも、そこに遊山という観光要素も取り入れてそれを拝観にでかける、苦しんでいるばかりではない市井の人々のたくましさもまた見ることができるといえる。

先述のように妙見道という名付けられた道があり、「講中」による道標が建立され、その講による道路整備までがなされた妙見堂は天明七（一七八七）年刊行の『拾遺都名所圖會』に掲載されるに至る。この時点ではすでに流行神という範疇ではなく、山科郷大塚村に定着した「山科のみようけんさん」という方がよいであろう。

妙見寺は現在三三年に一度開帳されている。門前の寺名を刻した石碑の裏面に「平成元年四月開帳記念」と刻され、境内の稲荷手前に細

長い石標がありそこには「大正十二年四月開帳記念」と刻されている。この間六六年である。よって昭和三一（一九五六）年に開帳があったのであろう。次回は平成三三（二〇二一）年に開帳されるだろう。山科の妙見さんは三三年に一度往時とは比べ物にならないであろうが賑わいをとりもどすのである。

〔注〕

- (1) 平成二二（二〇一〇）年七月二九日、電話での聞き書きによる。
- (2) 現在では奈良街道との交差点、「妙見宮」という道標から妙見寺までがその名で呼ばれているようである。周辺は山科区大塚南溝町という地名であるが、妙見道一帯は「妙見道町内会」という自治会になっている。
- (3) 『日親―その行動と思想―』二頁。
- (4) 同上、七五、七六頁。
- (5) 「町衆と日親」は『反骨の導師 日親・日奥』（寺尾英智・北村行遠編 吉川弘文館 二〇〇四年）に「五」（第五章）として掲載されている。
- (6) 『反骨の導師 日親・日奥』九七頁。
- (7) (3) に同じ二二五頁。
- (8) (5) に同じ九七、九八頁。
- (9) 『京都本法寺宝物目録』二二二頁。「11日匠書状」のト書き。
- (10) 同右四一頁。宝物番号四一二の項。
- (11) 『近松全集第一三巻』「日親上人德行記」解題 二四〇頁。
- (12) (3) に同じ二二六頁。
- (13) 平成二二（二〇一〇）年八月七日
- (14) 『日本国語大辞典 第二版 第十一巻』に「ひやくにちぼつけ【百日法華】」の項に「他の宗派の者が、病氣回復などを祈るために、一時的に日蓮宗に帰依すること。」とある。四九三頁。

- (15) 『日蓮教団の諸問題』は昭和五八（一九七三）年に刊行されている。
- (16) 本論文は(15)の八〇七頁から八四九頁に掲載されている。
- (17) (16)の八一五頁、八一六頁の要約。
- (18) 京都府宇治郡寺院明細帳由緒による。
- (19) 比留田家は『史料京都の歴史 第11巻 山科区』によると、「山科郷士の一員で上花山村に居住し、東野村の土橋家とともに山科郷惣触頭をつとめたけである。」とのことで、いわゆる比留田家文書はその「年代は正文にかぎればおもに寛永年間から明治にわたり惣触頭に職掌に関係した内容が多い。」一七頁。
- (20) 井の字を使用しているが、「くさかんむりに升」の字が正当。
- (21) 『妙見信仰の史的考察』八五―八八頁。
- (22) (21)に同じ。八九頁。
- (23) (21)に同じ。三四頁。
- (24) 楊谷寺由緒による。
- (25) 平成二二（二〇一〇）年九月四日、筆者は実際に妙見寺から江戸時代の東海道の起点三条大橋まで歩いた。行程は妙見寺―蓮如塚―明見道道標（本文での「道」道標のこと）―蹴上―三条白川光秀首塚―三条大橋である。蓮如塚近辺の東西の山科別院や首塚での簡単な参拝時間をとって約二時間半であった。妙見寺から直接日親廟塔へ行く場合には蓮如塚から渋谷街道を抜けるいうことになる。
- (26) 拙論「京都における神社伝承の変遷―中京区、御金神社を中心に―」、『京都民俗第24号』に掲載。二〇〇七年。あるいは拙論「現代の流行神と社寺伝承―金運をめぐる民間信仰を事例として―」参照。
- (27) 本居宣長の『在京日記』は宝暦二（一七五二）年二三才で故郷松阪を出て京都に遊学していた五年間の日記である。底本は筑摩書房の『本居宣長全集第十六巻』である。
- (28) この像が何を指すものかは今のところ（平成二二年八月）不明。明治の『京都府神社明細帳』にはこの像に関する記載は無い。ただ、妙見を祀る本堂、日蓮を祀る祖師堂という二つの堂宇の他に境内には辨天堂があり、本尊が明細帳上では由緒不詳の辨財天と記載され

ていることからこの像の可能性も残る。

- (29) 「妙見宮」の道標の東側側面に刻されている。筆者が現地で確認した後、京都市歴史資料館情報提供システム「フィールド・ミュージアム京都」の「いしぶみデータベース」及び京都市歴史資料館にて確認。

- (30) 京都市歴史資料館伊藤氏談

- (31) 拙論「流行りだす神仏―その構造と思想―」は『京都民俗第27号』に掲載。二〇一〇年

- (32) 『史料京都の歴史 第11巻 山科区』『大塚村』四一五頁。

【参考文献】

森銃三、北川博邦監修『続日本随筆大成別巻4 近世風俗見聞集4 月堂

見聞集下』吉川弘文館 一九八二年

中尾堯『日親―その行動と思想』評論社 一九七一年

中尾堯「日親」

(和歌森太郎編『日本宗教史の謎(下)』佼成出版社 一九七六年)

望月真澄「町衆と日親」

(寺尾英智・北村行遠編『反骨の導師日親・日奥』吉川弘文館 二〇〇四年)

坂本勝成「京都の妙見信仰―洛陽二十八カ所開運妙見の場合―」

(宮崎英修先生古希記念論文集刊行会編『日蓮教団の諸問題』平楽寺書店

一九八三年)

小松邦彰・冠賢一編『日蓮宗小事典』法藏館 一九八七年

立正大学日蓮教学研究会編『京都本法寺宝物目録』二〇〇一年

近松全集刊行会編『近松全集 第一三巻』岩波書店 一九九一年

京都市編著『史料京都の歴史 第11巻 山科区』平凡社 一九八八年

中西用康『妙見信仰の史的考察』相模書房 二〇〇八年

鏡山次郎『京都山科 音羽・大塚・音羽川二千年の歩み』つむぎ出版

二〇〇九年

大久保正編『本居宣長全集第十六巻』筑摩書房 一九七四年

小学館『日本国語大辞典 第二版 第十一巻』小学館 二〇〇一年

新修京都叢書刊行会『新修京都叢書 第七巻 拾遺都名所図会』臨川書店

一九六七年

新撰京都叢書刊行会『新撰京都叢書 第四巻 旧都巡遊記稿』臨川書店

一九八五年

(むらた のりお 文学研究科日本史学専攻博士後期課程)

(指導教員…八木 透 教授)

二〇一二年九月二十八日受理